

一般に「物事」というように、我々人間および我々を取り巻く世界を理解するための視点として、「モノ」的視点と「コト」的視点があると思われま

す。自然科学は、「モノ」的視点から、人間を含めた世界を構成する普遍的要素を究極まで突き止めることを目指し、宇宙の成り立ち、生物の遺伝メカニズムなど列挙に困るほど膨大な成果を生み出してきました。その原動力は、「モノ」とは何かを知りたい、理解したいという知的好奇心だと言えます。

これに対し、「コト」的視点から人間や世界の理解を目指す学問はあるのでしょうか？ 言い換えると、「『コト』とは何か？」と問われたとき、私たちはどう答えることができるのでしょうか？

色々調べてみると、古来から、「モノ」と「コト」について色々な分野の人が考察をしていることを知りました。たとえば、アリストテレスは、「質料」と「形相」、国語辞典的には、「モノ」：推移変動の概念を含まない対象、「コト」：時間的に展開・進展する出来事、言語学的には、「『コト』と『モノ』との区別は、『文』と文の資格を有する成分とそれを満たさないものに対応する。」¹⁾、さらに、複雑系に関する数学、物理学的考察では、「現実世界の多様性を暴力的に究極のモノに還元しないで、多様性自体の中にちょうど隠し絵みたいに潜んでいる不変性、変わらない構造があるのではないかという、そういういわばコトに軸足を置く科学というものが考えられる。」²⁾などがあります。

1998年10月けいはんな国際高等研究所で開催されたシンポジウムで、「『コトの科学』としての情報学」という講演を行ったところ、社会学の吉田民人先生にお会いし、「『コト』とは物質・エネルギーといった『モノ』の時間的・空間的、定性的・定量的なパターンであると定義され、(広義の)情報=『コト』と考えられる」という先生のお考えをお聞きしました。

この定義に基づくと、「いのち」や「こころ」も「コ

松山隆司 Takashi MATSUYAMA

京都大学大学院情報学研究科

[正会員] tm@i.kyoto-u.ac.jp

1976年京大大学院修士課程修了。京大助手、東北大助教授、岡山大学教授を経て、1995年より京大大学院教授。画像理解、分散協調視覚、3次元ビデオ、ヒューマン・コミュニケーション、エネルギーの情報化の研究に従事。本会元理事、フェロー、功績賞。

ト」の1つの様相であると言うことができ、「モノ」の科学がいくら進歩しても、うまく理解ができない「情報」、「生命」、「心」を対象とした学問を深化させるには、まず「コト」とは何かという、より根源的な疑問に答えるための体系、「『コト』の科学」の創成が必要となるという考えに至りました。

「『コト』の科学」の創成には、「モノ」の科学とはまったく違う体系が必要となることは分かりますが、浅学の身ではなかなか前へ進むことができませんでした。

そこで、情報学の研究者として実践できる「『コト』の科学」へのアプローチとして、従来から研究し



[シニアコラム]

IT 好き放題



[No.71]

「『コト』の科学」の創成を目指して

てきた分散協調型システムにおけるモジュール間の動的インタラクションに焦点を当て、「分散協調視覚」³⁾：知覚・行動・通信機能のリアルタイム統合、「人間と共生する情報システム」⁴⁾：ヒューマン・コミュニケーションの持つダイナミクスのモデル化、システム化、「エネルギーの情報化」⁵⁾：多数の変動電源・負荷のリアルタイム協調制御、を研究テーマとしてこの十数年研究をしてきました。

依然として「『コト』の科学」の姿は見えませんが、せめて半歩でも近づくことができればと思って研究を続けています。皆様のご意見を伺えれば幸いです。

参考文献

- 1) 李 長波：『モノ』・『コト』と『事象 event』について、第18回中日理論言語学研究会(2009)。
- 2) 山口昌哉、蔵本由紀：Science Talk：複雑な現象に立ち向かう現代物理学—多様性に潜む「コト」の不変性、ゑれきてる、70号(1998)。
- 3) 浮田宗伯、松山隆司：能動視覚エージェント群による複数対象の実時間協調追跡、情報処理学会 CVIM 研究会論文誌、Vol.43, No.SIG-11(CVIM 5), pp.64-79 (2002)。
- 4) 松山隆司、川嶋宏彰、鷲見和彦：人間と共生する情報システムの実現を目指して、情報処理、Vol.47, No.8, pp.851-858 (Aug. 2006)。
- 5) 松山隆司：エネルギーの情報化とは—背景、目的、基本アイデア、実現手法—、情報処理、Vol.51, No.8, pp.926-933 (Aug. 2010)。

(2016年9月21日受付)